

学校図書館を授業で活用するための教員研修プログラムの開発と その効果に関する研究[†]

富永香羊子^{*1}・中村康則^{*2}・向後千春^{*3}早稲田大学人間科学部^{*1}・早稲田大学大学院人間科学研究科^{*2}・早稲田大学人間科学学術院^{*3}

本研究では、教員に対して学校図書館を授業で活用するための研修プログラムを開発し、研修の効果を検証した。その結果、研修プログラムにおける学校図書館を活用した課題解決型の授業について、次の3点が明らかとなった。(1)児童生徒の主体的な学びを育み、学び方の習得に繋がる。(2)児童生徒の21世紀型能力の獲得に繋がる。(3)意図的・継続的に実施することが望ましい。これらの結果から、研修を通して学校図書館を授業で活用したことによって、教員の学校図書館活用への意識の変容を促し、一定の効果をもたらすことが示唆された。

キーワード：学校図書館、教員研修、課題解決型、学び方、21世紀型能力、生きる力

1. はじめに

2020年から実施される次期学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現にむけ、何ができるようになるのか、何を学ぶか、どのように学ぶかという「学びに向かう力」の重要性が示された(文部科学省2017)。急速なグローバル化の中で、教員は、予測困難な未来を生きるための資質・能力とされる21世紀型能力(国立教育政策研究所2013)を備えた児童生徒の育成が求められている。それらは、課題解決型の授業で、学びに向かう力を育むための学び方を身に付けさせることで実現可能となる。

学び方を学ぶために適切な場所は、学校教育法で定める全ての学校に設置されている学校図書館であると

考えられる(文部科学省2008)。学校図書館は、読書をする場所であるだけでなく、学習センターや情報センターとしての機能を併せ持っている(文部科学省2016)。塩谷・堀田(2008)は、学校図書館の計画的な利用について、「生きる力を育むために主体的に学ぶ学習やその基盤としての読書活動の推進を図ること」と、「情報社会に生きる児童が主体的に情報を収集、選択、発信できる力を身に付けること」をねらいとしていると述べている。

近年、ベテラン教員の大量退職に伴う教員の急速な若年層化が進み、「学校図書館を活用した授業を見たことがない」「授業で活用したことがない」「学校図書館を活用した授業の展開の仕方が分からない」という、学校図書館を活用することへの壁を感じている教員が、多数を占めるようになった。そのため、学校図書館を活用した授業方法の伝承を、校内研修や On the Job Training だけに頼るのは、難しい状況となりつつある。

このような状況を踏まえ、A市では、平成28年度から、教職4年の教員に学校図書館を活用した課題解決型の授業方法を習得させ、児童生徒に学び方を身に付けさせて、21世紀型能力を育む研修プログラムを開発した。この研修は、教育委員会主催の悉皆研修として実施することとした。本研究では、研修の効果を測るために、富永(2017)の「学校図書館の活用における指導観および期待感尺度」を改善し、その尺度を用いて研修の効果を検討することを目的とした。

2018年4月2日受理

[†] Kayoko TOMINAGA^{*1}, Yasunori NAKAMURA^{*2} and Chiharu KOGO^{*3}: Development of Teacher Training Program for Using School Library in the Class and Research on the Effects

^{*1} School of Human Sciences, Waseda University 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192 Japan

^{*2} Graduate School of Human Sciences, Waseda University 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192 Japan

^{*3} Faculty of Human Sciences, Waseda University 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1192 Japan

2. 方 法

2.1. 対象者と実施期間

対象者は、A市の小・中・義務教育・特別支援学校教職4年の教員62人(男性28人,女性34人)であった。

調査は、2回実施した。1回目は、2017年6月1日から6月19日の間に、質問紙調査を行った。2回目は、2017年7月1日から12月4日の間に、対象者が授業実践を行い、その後、質問紙調査と記述調査を行った。

2.2. 研修内容と手続き

2.2.1. 質問紙調査

質問紙調査は、模範授業の参観前と授業実践後に実施した。質問紙は、学校図書館を授業の中で活用するための「学校図書館の活用における指導観および期待感尺度(9項目)」「学校図書館の活用における21世紀型能力獲得尺度(10項目)」とした。質問紙の評定尺度は、両尺度ともに「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の4件法で測定した。

2.2.2. 模範授業の参観

対象者は、学校図書館を活用した授業の経験が少ないため、A市教育委員会の「授業の達人」に登録されている学校図書館活用の熟達者による、模範授業を参観した。熟達者は、学校図書館の活用を通して学び方が身につくように、授業のねらいにそって意図的に学校図書館を活用した、課題解決型の授業を学校図書館内で実施した。その中で児童生徒は、学校図書館の活用を通して知り得た情報をもとに、課題解決に向けて自らの意見を発信した。このような授業を通して児童生徒は、学び方を身に付けて、予測困難な未来を生きる力を育み、21世紀型能力を獲得していく。

2.2.3. 授業実践と質問紙および記述調査

対象者は、在籍校で児童生徒に学び方を身に付けさせるために学校図書館を授業のねらいにそって活用した課題解決型の授業を実施し、教育委員会の指定した用紙にまとめて提出した。その際、授業は、児童生徒が自らの意見を発信する場面を設定するよう指示した。その後対象者は、質問紙調査と記述調査を実施した。

3. 結 果

3.1. 学校図書館の活用における指導観および期待感尺度

学校図書館の活用における指導観および期待感尺度9項目(富永 2017)について、再度、探索的因子分析(最尤法,プロマックス回転)を実施した。因子抽出の

表1 指導観・期待感に関する因子分析の結果

設 問	質問項目	第1因子	第2因子
		課題 解決力	学習意欲
5	学校図書館を活用すると、課題を解決する力が付くと思う	.944	-.149
2	学校図書館を活用すると、自ら課題を見つけることができるようになると思う	.828	-.001
3	学校図書館を活用すると、情報を活用する力が付くと思う	.789	.054
9	学校図書館を活用する授業は、アクティブラーニング(課題解決)型の学習に繋がると思う	.617	.146
1	学校図書館を活用すると、情報を収集する力が高まると思う	.516	.213
7	学校図書館を活用する授業は、子どもの学習意欲を高める効果があると思う	-.092	.894
4	学校図書館を活用すると、知り得た知識を友達に伝えたいと思う	.047	.608
8	学校図書館を活用する授業は、教育課程全般での活用が可能だと思う	.265	.459
因子間相関			.600
因子寄与率			53.76% 13.62%

基準を固有値1.0以上としたところ、2因子解が最適であると判断された。しかし、因子負荷量の絶対値が.40未満の項目が1項目存在したため、これを削除した。その後、再度因子分析を実施したところ、8項目が最適であると判断された(表1)。第1因子の5項目は、課題の解決に繋がる因子と解釈し、「課題解決力」と命名した。第2因子の3項目は、学びへの意欲に繋がる因子と解釈し、「学習意欲」と命名した。各因子別の尺度項目の信頼性を検討するためクロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子が $\alpha = .876$ 、第2因子が $\alpha = .729$ であった。尺度全体では $\alpha = .869$ であった。

以上のように、学校図書館の活用における指導観および期待感尺度は「課題解決力」と「学習意欲」で構成された。

3.2. 学校図書館の活用における21世紀型能力獲得尺度

学校図書館の活用における21世紀型能力獲得尺度10項目について探索的因子分析(最尤法,プロマックス回転)を実施した。因子抽出の基準を固有値1.0以上としたところ、2因子解が最適であると判断された。しかし、因子負荷量の絶対値が.40未満の項目2項目存在したため、これらを削除した。その後、再度因子分析を実施したところ、8項目が最適であると判断された(表2)。第1因子の4項目は、他者とのコミュニケーションを図るために必要とされる因子と解釈し、「生きる力」と命名した。第2因子の4項目は、自ら主体的に学ぶために必要となる因子と解釈し、「学びに向

表2 21世紀型能力に関する因子分析の結果

設問	質問項目	第1因子	第2因子
		生きる力	学びに向かう力
9	学校図書館の活用は、社会参画力の育成に繋がると思う	.986	-.140
8	学校図書館の活用は、人間関係能力の育成に繋がると思う	.831	-.009
10	学校図書館の活用は、持続可能な未来への責任の保持に繋がると思う	.761	.141
2	学校図書館の活用は、論理的・批判的思考力に繋がると思う	.441	.230
4	学校図書館の活用は、言語スキルの向上に繋がると思う	-.058	.765
7	学校図書館の活用は、自律的活動力の育成に繋がると思う	.087	.713
6	学校図書館の活用は、情報 (ICT) スキルの向上に繋がると思う	-.051	.647
3	学校図書館の活用は、メタ認知・適応的学習力に繋がると思う	.219	.443
因子間相関		.619	
因子寄与率		51.93%	14.14%

かう力」と命名した。各因子別の尺度項目の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子が $\alpha=.864$ 、第2因子が $\alpha=.758$ であった。尺度全体では $\alpha=.864$ であった。

以上のように、学校図書館の活用における21世紀型能力獲得尺度は「生きる力」と「学びに向かう力」で構成された。

3.3. 研修前後の質問紙における意識変化

研修の効果を検討するため、因子ごとの下位尺度得点について、研修の前後で対応ありの t 検定を行った(表3)。その結果、「学びに向かう力」は、研修前にくらべ研修後で有意に上昇した。しかし、「生きる力」は、研修前にくらべ研修後で有意に低下した。その他の下位尺度については、研修前後における有意な差はみられなかった。

3.4. 共分散構造分析による因果モデル

指導観および期待感が「学びに向かう力」と「生きる力」に影響を与えると仮定し、交差遅れ効果モデルを用いた共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果、図1のモデルが得られた。適合度指標は、 $\chi^2(8)=6.047$, GFI=.975, AGFI=.888, CFI=1.000, RMSEA

表3 研修前後の t 検定の結果

	研修前 (n=62)		研修後 (n=59)		t 値
	mean	SD	mean	SD	
課題解決力	3.28	0.51	3.34	0.58	0.68 n.s.
学習意欲	3.19	0.60	3.33	0.65	1.60 n.s.
学びに向かう力	2.94	0.57	3.12	0.57	2.15*
生きる力	3.17	0.49	2.97	0.61	2.06*

* $p < .05$

=.000となった。豊田(2007)の適合度指標の基準を鑑みれば、このモデルの適合度は許容できると判断した。

4. 考察

指標とした4因子のうち、「学びに向かう力」の得点が、研修前に比べ、研修後に有意に上昇していた。このことから、教員は、学校図書館を活用した課題解決型の授業を行ったことによって、児童生徒の主体的な学びに必要な力が付いたと実感したことが推察された。これによって、児童生徒は、学び方の一部を身に付けたことが考えられる。

今井・河西(2010)は、図書館活用の専門的な教育を受けている教員は少なく、学校図書館を活用した学習に対するイメージを膨らませることが難しいと述べている。本研究では、教員に授業実践前に熟達者による模範授業を参観させた。それによって教員が、学校図書館を活用した授業のイメージをつかみ、課題解決型の授業実践をスムーズに行ったことで、活用の効果に繋がったと推察される。

しかし、「生きる力」の得点は、研修前に比べ研修後に有意に低下した。実践後の記述調査からは、「学校図書館内で授業をしたことで、友達に本を薦めたり、調べたことを教え合ったりする姿が見られた」「図書を授業で活用させる必要性は感じたが、課題解決にまではいたらなかった」という感想が得られた。これらの結果から、教員は、授業実践を通して、児童生徒のコミュニケーション力の向上が図られたことを実感した。しかし、授業の内容は、模範授業と比べて課題解決に向けた意図的な活用場面にまではならず、児童生徒の意見を発信させるところまでは、導けなかったと感じていることが推察された。

交差遅れ効果モデルによる共分散構造分析の結果、「課題解決力」が「学習意欲」に有意となる正のパスを示した。これは、教員が、学校図書館を活用した課題解

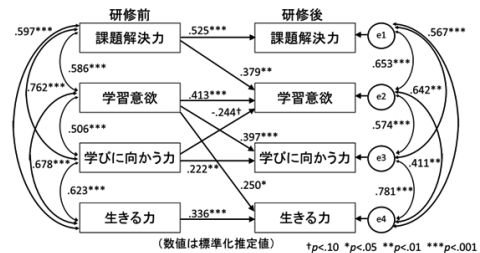


図1 交差遅れ効果モデルによる共分散構造分析

決型の授業を行ったことで、学習意欲が向上すると判断したためであると推察できる。また、「学習意欲」が「学びに向かう力」および「生きる力」に有意となる正のパスを示した。このことから、学校図書館は、授業のねらいにそって課題解決型の授業を行うことで、児童生徒の学習意欲を向上させ、さらに、主体的な学びに繋がり、学習の基礎となる力や、他者とのコミュニケーション力の向上に効果があることが示唆された。一方で、「学びに向かう力」が「学習意欲」に負のパスを示した。「学びに向かう力」は、学習における基本的なスキルであるため、受動的な活動が多くなり、学習意欲の向上には繋がりにくいことが推察された。

さらに、「課題解決力」は、「学習意欲」を高めているものの、「学びに向かう力」と「生きる力」のいずれにも有意なパスを示さなかった。教員の記述調査からは、「情報活用や問題解決の能力が非常に高まると感じた。しかし、年間の授業の中で意図的に活用することは難しかった」「授業での活用場面が限られてしまい、児童生徒の意見を発信する場面まで導けなかった」「インターネットの方が活用しやすい」という意見が出ていた。教員は、学校図書館を活用した課題解決型の授業を行うことによって児童生徒が主体的に学び、21世紀型能力を獲得しつつあることを実感した。しかし実際の授業は、生きる力を育む意図的な課題解決型の授業にはいたっていないと感じていることが推察された。

これらから教員は、学校図書館を活用した課題解決型の授業の効果を実感した。しかし、1回の授業では、生きる力を育み21世紀型能力の獲得にいたるまでの十分な指導ができていないと感じていることが推察された。また、教員の中には、インターネットの活用には有効性を感じる実態もあることが明らかとなった。堀田・木原（2008）は、学校図書館は情報センター機能も有しており、ICT活用が学力に及ぼす効果についても検討され、学術的にも立証されていると述べている。

以上のことから、学校図書館を授業で活用し、児童生徒に学び方を習得させるためには、継続的な研修の積み重ねが必要であることが示唆された。さらに、本研修と並行して、ICTを活用したインターネットなどの、学校図書館以外の手段でも情報活用スキルを身に付けさせる授業を行う必要性が示唆された。

5. 結 論

本研究では、教員に対して学校図書館を授業で活用するための研修プログラムを開発して効果を検証した。

その結果、学校図書館を活用した課題解決型の授業において、次の3点が明らかとなった。(1)児童生徒の主体的な学びを育み、学び方の習得に繋がる。(2)児童生徒の21世紀型能力の獲得に繋がる。(3)教員が、意図的・継続的に実施することが望ましい。

今後は、研修内容の充実やインターネット活用との併用、継続的な研修制度について、さらなる改善を行うことが課題であると考えられる。

付 記

本研究は、第一筆者による早稲田大学人間科学部2017年度卒業論文「学校図書館を活用した授業プログラムの開発とその効果に関する研究」の一部をまとめたものである。

参 考 文 献

- 堀田龍也, 木原俊行 (2008) 我が国における学力向上を目指した ICT 活用の現状と課題. 日本教育工学会論文誌, 32(3) : 253-263
- 今井亜湖, 河西由美子 (2010) 教師を対象とした学校図書館を活用した調べ学習の支援. 日本教育工学会研究報告集, 2010(4) : 115-118
- 国立教育政策研究所 (2013) 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 7
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h25/2_1_allb.pdf (参照日 2017.03.01)
- 文部科学省 (2008) 子どもの読書サポーターズ会議
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/08092920/002.htm (参照日 2017.03.01)
- 文部科学省 (2016) 学校図書館ガイドライン
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1380599.htm (参照日 2017.03.01)
- 文部科学省 (2017) 新しい学習指導要領等が目指す姿
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm (参照日 2017.03.01)
- 塩谷京子, 堀田龍也 (2008) 小学生に情報活用スキルを習得させるためのガイドブックの開発と効果. 日本教育情報学会学会誌, 24(4) : 15-26
- 富永香羊子 (2017) 学校図書館の活用における指導観および期待感尺度の開発. 日本学校図書館学会誌, 19 : 47-61
- 豊田秀樹 (2007) 共分散構造分析 [Amos 編] — 構造方程式モデリング. 東京図書, 東京

(Received April 2, 2018)